

令和6年度病害虫発生予報第6号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
普通期水稻	紋枯病 トビイロウンカ 穂吸汁性カメムシ類（防除情報第13号継続）	やや多 少 多	やや多 やや少 多
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	並 やや少	やや多 並
いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや少 並 やや少	やや少 やや多 やや少
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病） アザミウマ類	やや少 少	並 やや少
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ	並 少 やや多	やや多 やや少 やや多
果樹共通	カメムシ類（防除情報第12号継続）	やや多	やや多
茶	炭疽病 チャノキイロアザミウマ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	並 多 並 並 並 少 並	やや多 多 並 並 並 少 並

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

普通期水稻

1. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(72筆)の結果、発生株率は5.0% (4.0%)、発生圃場率は51.4% (40.4%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は54.5% (51.0%)であった。

2. トビイロウンカ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(72筆)の結果、株当たり虫数は0.0頭 (0.3頭)、発生圃場率は8.3% (48.8%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、株当たり虫数は0.0頭

(0.4頭)、寄生株率は1.0%(24.9%)であった。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の防除実施後もその後の発生状況に十分注意し、9月中旬に成虫・老齢幼虫を株当たり5頭以上認めた場合には早急に防除する。

イ 防除に当たっては、本虫の発生量は圃場間や同一圃場内でも偏りがあるので、圃場の見回りを徹底して、圃場全体の発生状況の把握に努める。

ウ 本虫は株元に好んで寄生するので、農薬散布は株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に行う。

エ 収穫時期が近いので、薬剤の散布時期に注意し使用基準を遵守する。また、周辺環境を十分に確認し、ミツバチを含め周辺動植物等への飛散等の影響がないよう十分注意する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

令和6年9月13日付け病害虫発生予察防除情報第13号を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況等

ア 9月前期の巡回調査(72筆)の結果、捕虫網による20回すくいとりあたり虫数は1.9頭(0.6頭)、発生圃場率は31.9%(19.2%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、捕虫網による20回すくいとりあたり虫数は1.0頭(1.6頭)であった。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(9筆)の結果、寄生株率は9.3%(7.7%)、株当たり虫数は0.2頭(0.4頭)、白変葉発生圃場率は44.4%(46.9%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率は2.0%(1.8%)、株当たり虫数0.0頭(0.0頭)であった。

ウ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、8月6半旬に大きなピークがあり、その後いったん減少したが9月3半旬では増加傾向にある(図)。

エ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

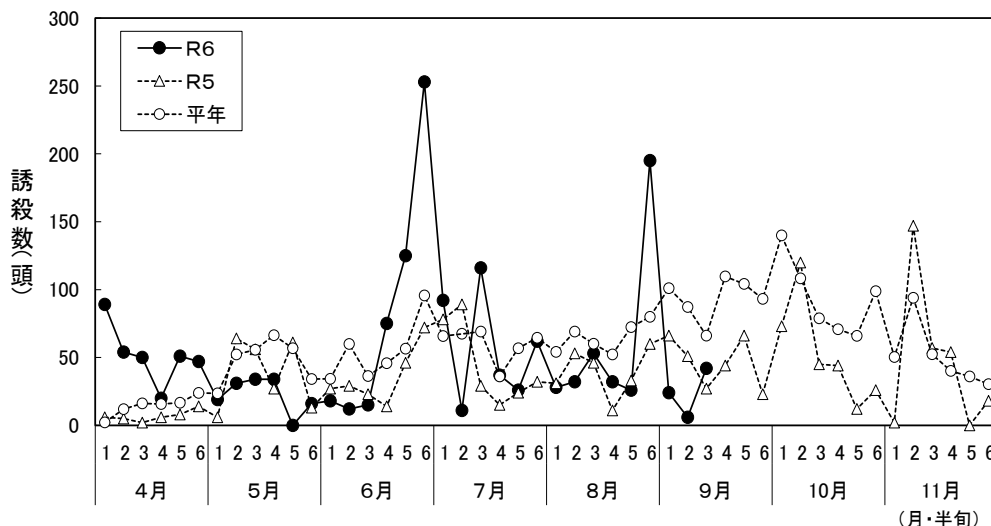


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越町)

2. 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(9筆)の結果、発生を認めなかった(寄生株率0.3%、株当たり虫数0.0頭、発生圃場率12.8%)。

イ 9月3半月の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率は2.0%(3.1%)、株当たり虫数は0.0頭(0.1頭)であった。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 稚莢期から莢肥大期にかけて薬剤散布を行う。また、薬剤は着莢部によくかかるよう、丁寧に散布する。

イ ミナミアオカメムシに対しては一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査(20筆、育苗圃)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.0%、発生圃場率0.4%)。

2. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(20筆、育苗圃)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.0%、発生圃場率13.3%)。また、8月後期の巡回調査(23筆)においては、発生圃場率が17.4%(10.3%)とやや高かった。

イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

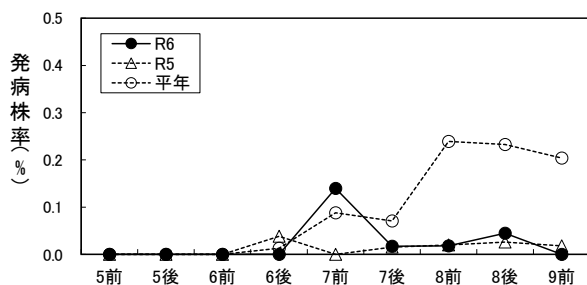


図 炭疽病 発病株率の推移

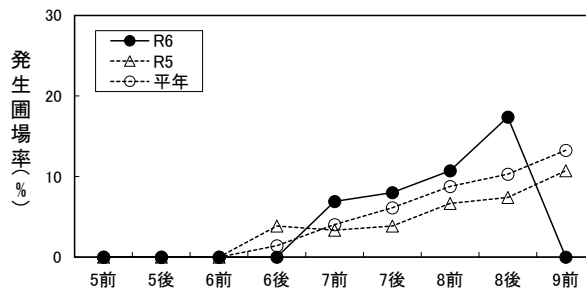


図 炭疽病 発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

本圃で発病すると防除が困難であるので、今後、定植する圃場では苗の選別を徹底し、健全株を定植する。

3. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査(20筆、育苗圃)の結果、寄生株率は1.9%(5.1%)、発生圃場率は10.0%(38.2%)であった(図)。また、8月後期の巡回調査(23筆)では、寄生株率は6.4%(7.8%)、発生圃場率は47.8%(53.3%)と平年並の発生であった。

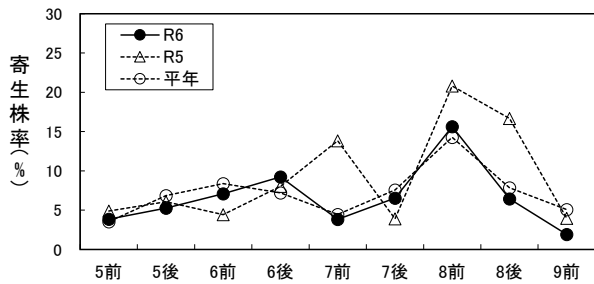


図 ハダニ類 寄生株率の推移

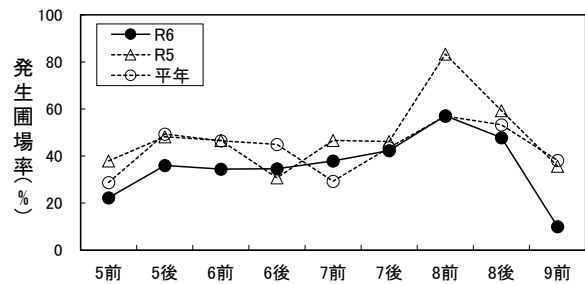


図 ハダニ類 発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本圃でハダニが多発すると防除が困難になるため、本圃へ持ち込まないよう定植前までの防除を徹底する。すでに定植した圃場では、発生状況の把握に努め発生初期に防除する。
- イ ハダニ類は下葉の裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準P 2 1 8～2 2 1の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。また、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤を積極的に活用するが、卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。
- エ 天敵を用いる圃場では薬剤の選定や使用時期に留意し、天敵に影響の小さい薬剤を使用する。

アスパラガス

1. 斑点性病害

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

- ア 9月前期の巡回調査（10筆）の結果、発病側枝率は10.6%（14.6%）、発生圃場率は80.0%（69.3%）で、一部多発圃場が見られた。
- イ 向こう1か月の降水量は多い見込みであり、本病の発生に好適である。

2. アザミウマ類

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠

- ア 9月前期の巡回調査（10筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は7.6頭（13.6頭）、発生圃場率は10.0%（56.9%）で一部多発圃場が見られた（図）。
- イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

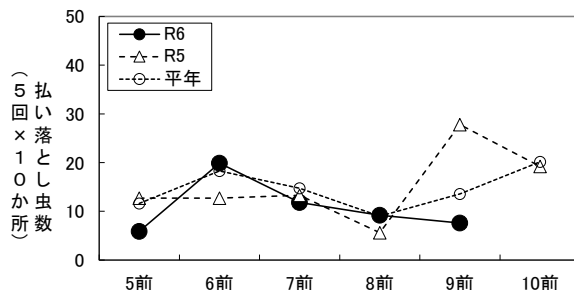


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

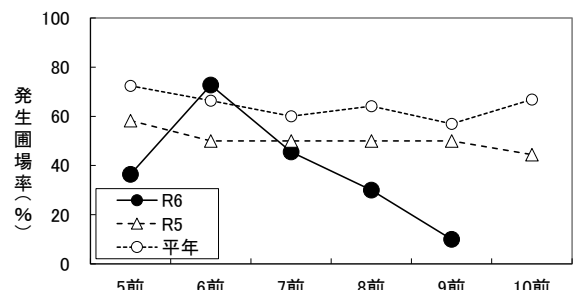


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病葉率は0.2%(0.5%)、発生圃場率は25.0%(19.4%)、発病果率は0.1%(0.4%)、果実での発生圃場率は16.7%(14.6%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は少ない見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の抑制には、予防的な薬剤散布が効果的である。強風を伴う雨が予想される場合には事前に銅水和剤の散布を行う。

イ 銅剤は高温期に散布すると薬害を生じることがあるため注意する。また、薬害防止のため農薬のラベルに従い、炭酸カルシウム水和剤(クレフノン等)を混用する。

ウ 感染源を減らすため、発病枝や発病果は除去し、圃場外に持ち出し処分する。

2. 黒点病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病果率は0.3%(5.7%)、発生圃場率は16.7%(36.1%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は少ない見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤散布にあたっては収穫期に近い品種では使用時期を確認し、使用基準を遵守する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は6.0%(2.8%)、発生圃場率は41.7%(28.8%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 盛夏期を過ぎて気温が低下してくると発生が増加するので、発生初期に防除する。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和6年長崎県病害虫防除基準P390～393およびP398～401の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

ウ 薬剤感受性が低下している場合があるので、効果の高い薬剤を選定する。具体的データについては、病害虫防除所ホームページのかんきつのミカンハダニ薬剤感受性検定結果を参照する。

果樹共通

1. カメムシ類

令和6年8月30日付け病害虫発生予察防除情報第12号を継続。

なお、その後の発生状況については、以下のとおりである。

(1) 発生状況等

ア かんきつでの9月前期の巡回調査(36筆)の結果、発生を認めていない(発生圃場率1.4%)ものの、8月下旬以降、かんきつ園への飛来が確認されており、一部の圃場で

は落果などの被害が発生している。

イ フェロモントラップ（諫早市、西海市）による誘殺数は平年並～やや多で、地点によって異なる（図）。

ウ 予察灯（諫早市：青色・白色、南島原市）による誘殺数は、一部地域で平年より多い（図）。

エ ヒノキきゅう果の口針鞘数調査結果から、すでにヒノキからの離脱は進んでいると思われる（令和6年8月2日付け病害虫発生予察技術情報第2号参照）。

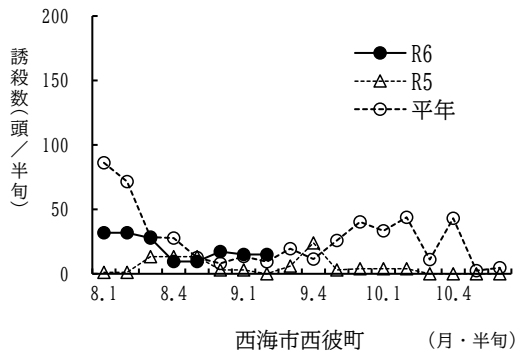
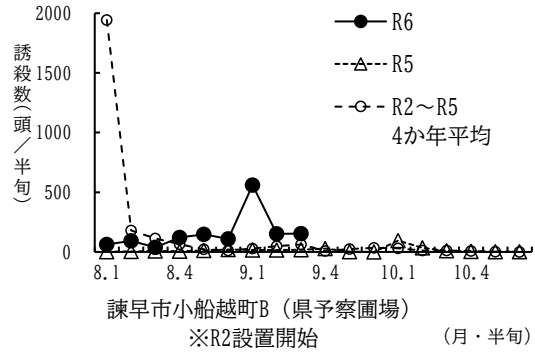
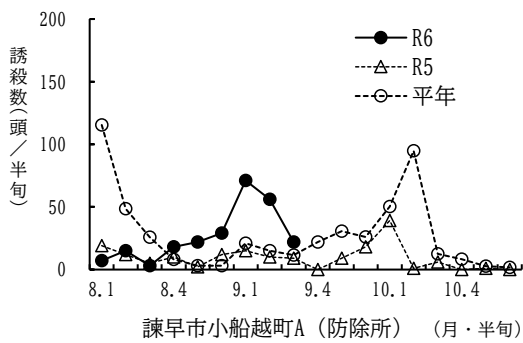


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況（黄色コガネコール）

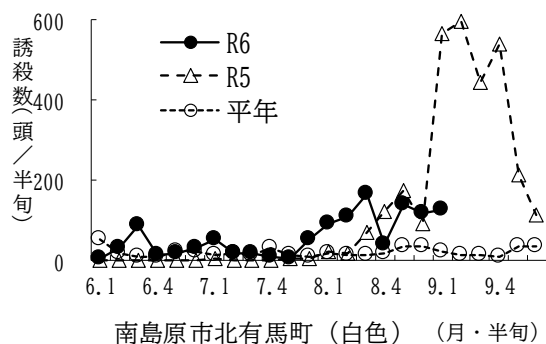
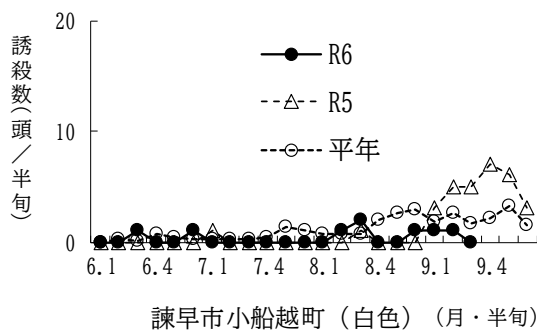
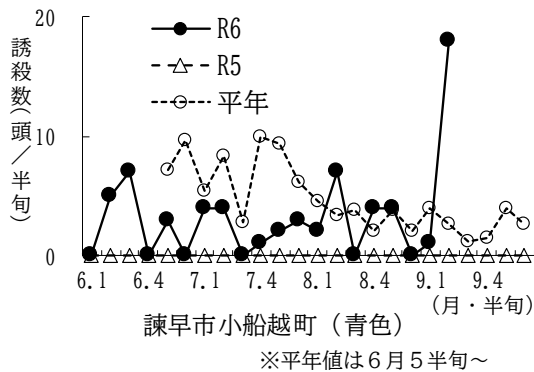


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ誘殺状況（予察灯：白色、青色）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来量や飛来時期は園地により異なる場合があり、集中的に加害されるおそれもあるので、果樹園の見回りを徹底するとともに予め防除薬剤を準備し、飛来や被害果を認めたら早急に防除を行う。とくに山林に近い園地や毎年発生が認められる園地では注意する。
- イ 果樹カメムシ類は主に夕方から夜間に飛来して果実を加害する傾向があるため、薬剤散布は夕方に行う。また、薬剤散布にあたっては使用時期、使用回数等を確認し、使用基準を遵守する。

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(12筆)の結果、1㎡当たり発病葉数は3.6枚(3.9枚)、発生圃場率は83.3%(76.8%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は少ない見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和6年長崎県病害虫防除基準P430～431の「作用機構による分類(FRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 多

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査(12筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は31.9頭(8.1頭)、発生圃場率は100%(84.4%)であり、一部多発圃場が見られた。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和6年長崎県病害虫防除基準P432～435の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月前期の巡回調査(12筆)の結果、1㎡あたり巻葉数は0.1枚(0.1枚)、発生圃場率は8.3%(10.6%)であった。

イ フェロモントラップ(東彼杵町)による誘殺量は、平年並～少なく推移している(図)。

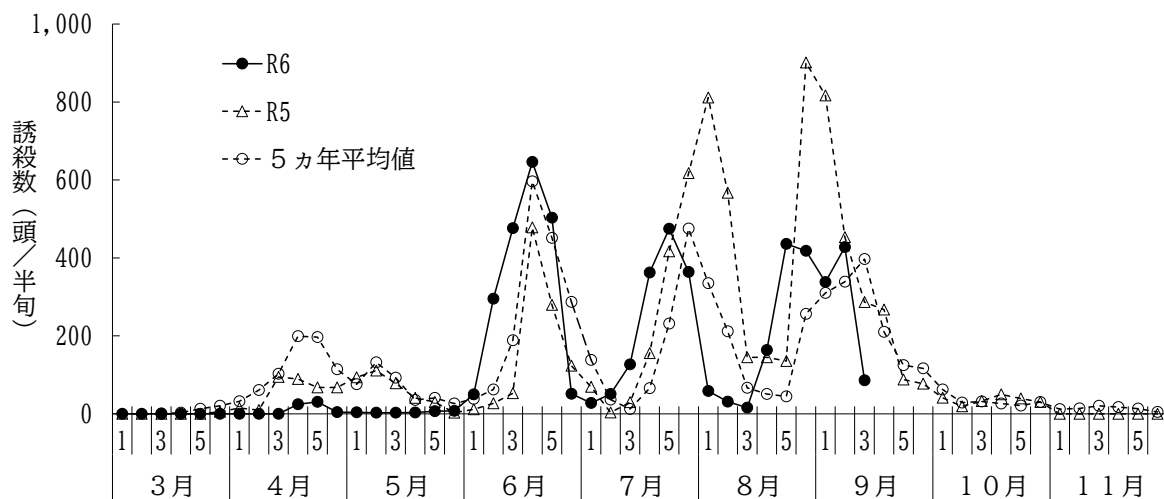


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）
※茶業研究室調べ

（月・半旬）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、昆虫成長制御剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約10日後である。
- イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準P432～435の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

4. チャノホソガ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

- ア 9月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.0枚（0.1枚）、発生圃場率は16.7%（7.6%）であった。
- イ フェロモントラップ（東彼杵町）による直近の誘殺量は、平年並～やや少く推移している（図）。

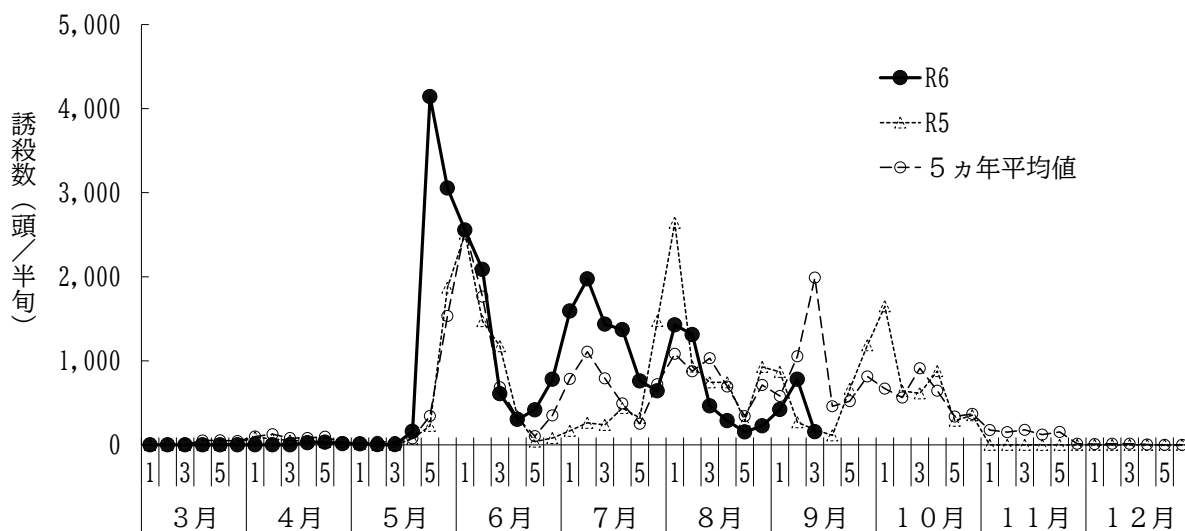


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）（月・半旬）
※茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、昆虫成長制御剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約10日後である。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準P432～435の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査（12筆）の結果、寄生葉率は1.0%（0.7%）、発生圃場率は25.0%（14.8%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準P432～435の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は0.2頭（1.8頭）、発生圃場率は8.3%（47.6%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準P432～435の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月前期の巡回調査（12筆）の結果、寄生株率は1.3%（0.7%）、発生圃場率は16.7%（7.5%）であった。

